第３課　王の系統を引く祭司

【暗唱聖句】

「しかし、あなたがたは、選ばれた民、王の系統を引く祭司、聖なる国民、神のものとなった民です。それは、あなたがたを暗闇の中から驚くべき光の中へと招き入れてくださった方の力ある業を、あなたがたが広く伝えるためなのです。」第一ペテロ2:9

【今週のテーマ】

今週はクリスチャンとしての聖なる責任と召しについて学びます。ペテロは手紙を手にして読むクリスチャンたちを「聖なる国民、神の者となった民」と呼んで、聖なる自覚を促しています。異邦人であっても接ぎ木された木のように、選民であったユダヤ人クリスチャンたちと同様に聖なる民となっています。その上で、彼らには聖なる責任と召しがあることを教えています。それは救いの真理を述べ伝えることでした。

【日曜日　クリスチャンとして生きる】

「だから、悪意、偽り、偽善、ねたみ、悪口をみな捨て去って」第一ペテロ2:1

2章は「だから…」という言葉で始まっています。つまり1章のその直前までの言葉の続きと言うことですが、そこには私たちは主によって贖われ、主による信仰と希望に生き、み言葉によって新たに生まれたのだと書かれてありました。だから…と2章の言葉に続いていきます。神様によって選ばれ、神の子として生きているわたしたちには、それにふさわしい生き方が求められているということです。では、それはどのような生き方なのでしょうか。

「だから、悪意、偽り、偽善、ねたみ、悪口をみな捨て去って、生まれたばかりの乳飲み子のように、混じりけのない霊の乳を慕い求めなさい。これを飲んで成長し、救われるようになるためです。あなたがたは、主が恵み深い方だということを味わいました」第一ペテロ2:1～3

神の子たちはみな、悪意、偽り、偽善、ねたみ、悪口をみな捨て去ります。それはまるで生まれたばかりの乳飲み子のようになることです。そして乳飲み子が乳を求めるように、霊的な神の乳飲み子は、神の子としてさらに成長するために混じりけのない霊の乳を慕い求め、それを飲まなければなりません。救われたからそれでももう終わりではなく、救われた者としてさらに上を目指して成長していくのです。

そのとき大切なのは霊の乳を飲むことです。主は私たちに何かを捨て去ることだけを要求しているのではなく、逆に素晴らしいものを求めることも要求しているのです。赤ちゃんは母乳を飲まなければ成長できません。同じようにわたしたちも神の霊的な母乳を求めて良いのです。そもそも赤ちゃんは大きくなろうと努力することができません。しかし母乳を一生懸命、泣いて求めて、それを飲むと驚くほどすくすくと成長していきます。霊的な成長も同じです。人間的な努力では霊的に成長する術がありません。だから、聖霊を慕い求めて、それをいただくのです。すると不思議な変化が起こります。知らず知らずのうちに霊的に深く、大きく、成長していくことができるのです。

【月曜日　生きた石】

「2:4 この主のもとに来なさい。主は、人々からは見捨てられたのですが、神にとっては選ばれた、尊い、生きた石なのです。2:5 あなたがた自身も生きた石として用いられ、霊的な家に造り上げられるようにしなさい。そして聖なる祭司となって神に喜ばれる霊的ないけにえを、イエス・キリストを通して献げなさい。 2:6 聖書にこう書いてあるからです。「見よ、わたしは、選ばれた尊いかなめ石を、シオンに置く。これを信じる者は、決して失望することはない。」 2:7 従って、この石は、信じているあなたがたには掛けがえのないものですが、信じない者たちにとっては、「家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった」のであり、2:8 また、「つまずきの石、妨げの岩」なのです。彼らは御言葉を信じないのでつまずくのですが、実は、そうなるように以前から定められているのです」第一ペテロ2:4～8

ペテロは霊的な乳を飲みなさいと言ったあと、具体的にではどうすれば良いのかについて語ります。それは恵み深い「主のもとに来なさい」ということでした。主のもとにおいてわたしたちは霊的に成長していくことができるのです。しかし、この主なるイエス様は人々から見捨てられました。わたしたちを霊的な永遠の命へと成長させてくださる唯一の方を多くの人が捨てたのです。

聖書は次のように語ります。「イエス様は人々から見捨てられたが、彼こそ父なる神様から選ばれた尊い生きた石だったのだ」と。なぜ石と例えられているのでしょう。イスラエルは建物も道路もみな石ばかりでできています。石の建物が崩れたら、その石の上にまた石を重ねて建物を造っていきます。イスラエルでは「石」は最も重要な建築資材なのです。だから役に立たないと判断されたら捨てられてしまいます。そのような背景の中で、イエス様を石に、しかも捨てられた石に例えているのです。

つまり、イエス様は家を建てるための生きた石なのだと。しかも、多くの人々は役に立たないと捨てたはずなのに、この石こそ家を建てるときに最も重要となる親石だったのだと語るのです。この親石がなければしっかりとした家は建ちません。家とは教会のことを指します。同時にわたしたち一人ひとりのことを指します。イエス様という親石の上に、たくさんの石が積み重ねられて教会が建てあげられていきますが、その積み上げられていく石とはわたしたち一人ひとりのことであるとペテロが語ります。

「あなたがた自身も生きた石として用いられ、霊的な家に造り上げられるようにしなさい…」第一ペテロ2:5

私たち一人ひとりも主と同じように霊的に生きた石なのだと言います。石には命は宿っていません。しかし、わたしたちは主にあって生きている者です。つまり教会を建てあげていくために、あるいは一人ひとりが神殿としての生きた働きがあるということです。それは祭司としての働きであるとペテロは続けます。

「…そして聖なる祭司となって神に喜ばれる霊的ないけにえを、イエス・キリストを通して献げなさい」第一ペテロ2:5

祭司が神様とその民を仲介する働きをしたように、わたしたちも神様と人々を橋渡しする尊い働きが与えられています。そのためにもまず私達自身がいつも主のもとに生き、主の麗しさの中で成長し、霊的命に輝く生きた石でなければならないということです。

【火曜日　神の契約の民】

ペテロは旧約聖書の基本ともなっている神様と私達との間に結ばれた契約という視点で手紙を書いています。契約を意味する「ベリト」という言葉は、2者間の契約、個人対個人の間で結ばれる特別な契約を意味するものです。つまり、「神様とわたし」という関係における契約であり、第三者が入り込む余地のないものです。実例を挙げると、神様がアブラハムと交わした契約が有名です。

「アブラムが九十九歳になったとき、主はアブラムに現れて言われた。「わたしは全能の神である。あなたはわたしに従って歩み、全き者となりなさい。17:2 わたしは、あなたとの間にわたしの契約を立て、あなたをますます増やすであろう。」17:3 アブラムはひれ伏した。神は更に、語りかけて言われた。17:4 「これがあなたと結ぶわたしの契約である。あなたは多くの国民の父となる」　創世記17:1～4

神様はアブラハムに対して、あなたの子孫を大いに増やすという契約を結ばれました。アブラハムには子どもがおらず、しかも、彼も妻のサラもすでに年老いていました。しかし、神様は子どもが生まれることを約束され、それをアブラハムとの契約とされたのです。

「神はその嘆きを聞き、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約を思い起こされた」出エジプト2:24

アブラハムが亡くなって長い年月が過ぎたにも関わらず、神様はアブラハムと立てた契約を思い起こされたと書かれてあります。一度立てられた契約を神様が忘れることはありません。しかし、神様との契約は無条件ではありません。通常2者が契約関係にあるとき、互いに守るべき義務があり、それを守らない場合は契約が破棄されます。イスラエルの民たちと神様との間に立てられた契約も同様で、彼らは神様の律法に対して服従することが条件でした。この条件を破ったことによって、最後はアッシリアやバビロンに滅ぼされていくことになります。

【水曜日　王の系統を引く祭司】

「あなたがた自身も生きた石として用いられ、霊的な家に造り上げられるようにしなさい。そして聖なる祭司となって神に喜ばれる霊的ないけにえを、イエス・キリストを通して献げなさい。」第一ペテロ2：5

「しかし、あなたがたは、選ばれた民、王の系統を引く祭司、聖なる国民、神のものとなった民です。それは、あなたがたを暗闇の中から驚くべき光の中へと招き入れてくださった方の力ある業を、あなたがたが広く伝えるためなのです。」第一ペテロ2：9

ペテロは、あなたがたは聖なる祭司、王の系統を引く祭司であると語っています。この言葉は、旧約聖書の中にも見られます。

「今、もしわたしの声に聞き従いわたしの契約を守るならば、あなたたちはすべての民の間にあってわたしの宝となる。世界はすべてわたしのものである。あなたたちは、わたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる。これが、イスラエルの人々に語るべき言葉である。」出エジプト19：5～6

聖書は神様を信じる民に対して、あなたがたは聖なる祭司、王（神）の系統を引く祭司であり、ゆえに祭司の王国に属する民となったのだと、旧新約聖書を通して、一貫して教えています。本来、アブラハムとその子孫に与えられた特権を、今や神様を信じるすべてのクリスチャンにもあてはめているのです。これは実に驚くべきことです。

またこれは神様との間に建てられた契約ですから、わたしたちはこの契約を守る義務があります。それはペテロの言葉を借りるならば「神に喜ばれる霊的ないけにえをささげること」であり、「主の業を伝えること」です。

【木曜日　力ある業を広く伝える】

祭司とは神様と人とつなぐ働きがあります。それゆえに、「あなたがたを暗闇の中から驚くべき光の中へと招き入れてくださった方の力ある業を、あなたがたが広く伝えるたなのです」と教えられているのです。

イエス様を述べ伝えるためにわたしたちは選ばれたのです。イスラエルの民たちがなぜ選民として選ばれたのか、それは彼らが主の栄光を世に証するためでした。彼らの存在そのものが、主の栄光、主の証となるはずでした。そのために特別な祝福と特権が与えられていたのでした。

「あなたたちはそれを忠実に守りなさい。そうすれば、諸国の民にあなたたちの知恵と良識が示され、彼らがこれらすべての掟を聞くとき、「この大いなる国民は確かに知恵があり、賢明な民である」と言うであろう。」申命記4：6

イスラエルの民は神様から特別な知恵が与えられ、賢明な民となりました。またイスラエルの民は他の国民よりもはるかに勝っていました。それは神様を証するためでした。わたしたちも主の祈るときに天来の知恵が与えられ、それが主の証として用いられます。

「起きよ、光を放て。あなたを照らす光は昇り、主の栄光はあなたの上に輝く。見よ、闇は地を覆い、暗黒が国々を包んでいる。しかし、あなたの上には主が輝き出で、主の栄光があなたの上に現れる。 国々はあなたを照らす光に向かい、王たちは射し出でるその輝きに向かって歩む」イザヤ60：1～3

イスラエルの民は主の光を照らすとき、他の国の人々はその光に向かって歩み出すとの約束です。わたしたちも主の栄光を輝かすなら、多くの人がその光を認め、主に従うようになります。しかし、このようなわたしたちは、もともとは神様の民ではありませんでしたし、神様の憐みの外に生きていました。それは今や主を信じるようになり、すべてが変わりました。

「あなたがたは、「かつては神の民ではなかったが、今は神の民であり、憐れみを受けなかったが、今は憐れみを受けている」のです」第一ペテロ2:10

本来イスラエルの民い与えられた使命を引きついているのが、現代に生きるクリスチャンということです。